

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2013～2017

課題番号：25257007

研究課題名(和文) 国際標準となるチベット美術の情報プラットフォームの構築と公開

研究課題名(英文) Constructing and Publishing the Information Platform of Tibetan Buddhist Art in International Standards

研究代表者

森 雅秀 (Mori, Masahide)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：90230078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 29,300,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトの主たる目的であるチベット仏教美術情報プラットフォームの構築と公開を実現させた。公開された資料の中心を占めるのは鶴見大学図書館に所蔵されている逸見梅栄の画像コレクションである。これらは戦前に中国の旧・満州を中心に撮影された写真データ約2500点で、いずれもチベット美術の画像データとして極めて高い歴史的価値を持つ。これに加え、データベース公開にむけての資料収集のための現地調査を中国、インド、ネパール、イギリス、アメリカ合衆国等で実施するとともに、国内の研究機関等が所蔵するチベット美術の画像データを、情報プラットフォームに統合する作業を進めた。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this project is constructing the information platform of Tibetan Buddhist art, and it is public on web now. The substantial contents of this platform consists of the image data of Tibetan Buddhist art collected by Henmi Baiei in Tsurumi University Library. It amounts to more than 2,000 and most of them were taken in Manchuria in the 1930s. This collection has historical values exceedingly from the viewpoints of Oriental studies as well as art history. Furthermore, we carried out the field surveys of Tibetan Buddhist art both in Japan and abroad, i. e. China, India, Nepal, UK, USA and so on to accumulate the material for completing the information platform.

研究分野：インド哲学・仏教学、美術史

キーワード：情報プラットフォーム チベット美術 データベース

## 1. 研究開始当初の背景

(1)チベット仏教はインド仏教の正統的な流れを継承しつつ独自の文化と融合させ、アジア仏教史の中で独特の位置を占める。チベット仏教の文化的側面としてとりわけ重要なのが美術である。チベットの仏教文化を理解する上で、美術研究は不可欠な要素である。海外では仏教美術の重要な領域としてチベット美術がとらえられ、G. Tucci や D. Snellgrove などの東洋学の泰斗たちがその研究を進めてきた。現在でも D. Jackson、A. Heller などによって、すぐれた研究が進められている。

(2)わが国のチベット学は世界的にもトップレベルにあるが、美術研究は必ずしもその中心的な位置を占めているわけではない。しかし、その中で初期の入蔵者である河口慧海や青木文教らによってチベット美術の作品や写真資料がもたらされている。戦後は中国における入国制限の厳しさから、周辺地域への調査が優先され、とくに 1970 年代後半からのインド・ラダック地方への高野山大学による調査隊の派遣は大きな成果をもたらした。しかし、近年では比較的、研究は低調で、海外でのめざましい研究の進展に比べ、わが国におけるチベット美術研究は、かならずしも盛況とは言えない。

(3)研究代表者は密教のアジア諸地域への伝播の研究を文化史的視点から進めてきた。そのなかで密教美術の受容と変容は大きな位置を占めている。とりわけチベット美術に早くから注目し、科研費による研究においても、研究代表者として 2 件のチベット美術研究と 3 件の関連領域での研究、研究分担者としての 4 件のチベット仏教研究への参画などを通して、成果を継続的に発表してきた。そして、それらを結実させた『チベットの仏教美術とマンダラ』(名古屋大学出版会 2011)を発表し、チベット美術研究に新たな地平を開いた。

(4)現在チベットが置かれている状況は、政治的にも経済的にもけっして平穏ではなく、伝統的な文化が急速に失われている。1970 年代におこった文化大革命によって、仏教寺院の大半は壊滅的な状況に追い込まれたが、そのなかでかろうじて生き延びた文化財も、保存や修復がなされないまま、現在、荒廃の波にさらされている。チベットの仏教美術は人類共通の貴重な文化遺産であり、その重要性や学術的な意義を内外にひろく伝えることが、われわれ研究者にとっても重要な責務である。

## 2. 研究の目的

(1)チベット仏教を中心とするチベット美術の研究基盤を整備し、視覚芸術を中心としたチベット文化の全体像を明らかにする。現在、

わが国のチベット美術研究は個別の研究者による単発的な調査とその報告が中心をなしている。本研究では組織的な現地調査を実施し、体系的な資料の収集を行う。その一方で、わが国には過去における重要な調査成果の蓄積がある。とくに、高野山大学のラダック、スピティ地方の写真資料(高野山大学・チベット文化研究会所蔵)、戦前の逸見梅栄による写真資料(鶴見大学図書館所蔵)、さらに、近年、精力的にチベットのアート調査を進めている正木晃による写真資料や、研究代表者自身による写真資料(いずれも金沢大学所蔵)などがある。その総数は数万点におよぶが、すでに失われた貴重な文化財の写真や、現地においても公開されていない作品の写真も多数含まれている。本研究ではこれらの調査が行われた地域を主たる対象とすることで、さらなる資料の充実を図るとともに、国内資料の価値の再評価を行い、チベット美術の歴史的な重層性も明らかにする。

(2)チベット仏教美術の主要なジャンルである絵画、彫刻、工芸、壁画、建築などに関する画像データを中心に、作品そのものの基礎的情報(法量、時代、制作地、所属する宗派、撮影日、撮影者など)に、テキスト情報、書誌情報、さらに地理的情報などを加えた統合的・包括的データベースのフォーマットを開発し、チベット仏教美術のデータベースの構築と公開を行う。チベット美術に関する過去の主要な報告書との照合も行い、それらに含まれる情報ともリンクさせ、特定の作品にかかわるさまざまな情報を、一元的に管理できる情報プラットフォームを開発し、公開する。

(3)現在、チベット美術に関するデータベースは、アメリカ合衆国の Rubin Foundation のコレクションからスタートした Himalayan Art があり、Web 上で公開されている。本研究ではその母体である Himalayan Art Resources と密接な連携を取り、フォーマットに関する情報交換、相互のリンク、データの共有などを進め、チベット美術のデータベースに関する世界的な標準モデルを提唱する。すぐれた伝統を持ち、貴重な資料を多数所蔵するわが国のチベット学こそが、世界のチベット研究でイニシアティブをとるべきであり、逆に、今こその分野で主導的な役割を果たさなければ、将来にわたる沈滞化は避けられない。

(4)チベット美術を中心とする情報プラットフォームを開発することで、人文科学における情報の整理、統合、発信にかかわる基本的なモデルを提供する。今後、インド、中国、日本などの仏教美術の分野でも応用可能な汎用のプラットフォームを開発し、仏教美術、さらには図像学や文化史研究に貢献する。

## 3. 研究の方法

(1)中国やインドをはじめとする海外の諸地域においてチベット美術の画像データを収集する。あわせて、国内にある資料との照合と、両者を包括するデータベースを作成する。美術作品と関連する文字データ、すなわち、名称、時代、法量、所蔵などの基本的な情報であるメタデータに加え、関連する仏教文献に含まれる図像学的情報なども総合的に扱うための環境を整備する。これらのデータベースを統合し、公開するための情報プラットフォームの開発を進める。研究グループ全体が適切な分業体制を取ることで作業の効率化を図るとともに、全体の作業工程策定のために、コアメンバーによる運営会議と、各班の活動を相互に検証し、成果を共有するための全体研究会を定期的開催し、組織全体の有機的な連携を図る。

(2)本プロジェクトの中心的課題はチベット美術の情報プラットフォームの開発である。研究代表者は、プロジェクト開始時にすでに所蔵資料を中心とした情報リポジトリを試行的に公開していたが(<http://atlas.db.kanazawa-u.ac.jp/dspace>)、このシステムに改良を加え、人文学のさまざまな分野で利用できる汎用的な情報プラットフォームに整備する。このシステムの開発は研究課題全体の中核を占め、他の課題の成果を統合するための基礎となる。

(3)情報プラットフォームの開発において、本プロジェクトが最大のターゲットとしたのが、横浜市の鶴見大学図書館が所蔵する逸見梅栄の画像資料である。逸見梅栄はわが国のチベット美術研究の先駆者で、おもに昭和10年代に北京市(当時は北平)や承德市を中心とする中国北東部でチベット仏教寺院の調査を行ったが、その時に撮影されたガラス乾板による写真資料が、調査ノートや草稿とともに、鶴見大学図書館に保管されている。これらは戦前の中国本土のチベット美術の状況を伝える第一級の資料である。これらの資料について優先的にデジタル化とデータベース化を進め、世界的にも貴重な資料の公開と情報発信を行う。本資料の公開は、単なる画像データベースの開発にとどまらず、日本におけるチベット美術研究の黎明期の研究動向を解明する手がかりになるとともに、戦前の日本の東洋学がどのような意義を持つかを示すことにもつながる。

(4)現地調査に関しては、中国、インド、ネパールにある寺院や主要な博物館が対象となるほか、イギリス、アメリカ合衆国などの欧米諸国の博物館にある東洋美術関係のコレクションも重要である。このうち、北京市内の雍和宮、故宮博物院、北京首都博物館、瀋陽市の遼寧省博物館などには、チベット仏教美術の膨大なコレクションが所蔵されて

いる。また、河北省の承德は戦前は熱河と呼ばれ、清朝のチベット仏教寺院が現在でも多数残っている。これらの一部は、上述の逸見梅栄の画像データの被写体に一致する。故宮博物院等の全面的な協力を得て、それぞれのコレクションの調査を行い、とくに逸見梅栄の画像データに含まれる被写体については、その特定や現状について確認作業を行う。

(5)その他の地域の現地調査に関しては、インドにおいては、ニューデリーの国立博物館、ムンバイのチェトラパティ・シヴァージー美術館、ネパールではカトマンドゥ市内の仏教寺院(スヴァヤンブーナート、ボータナートなど)が調査対象となる。欧米諸国に関しては、イギリスの大英博物館、ヴィクトリア&アルバート美術館、アメリカ合衆国のメトロポリタン美術館、ボストン美術館、ルービン美術館などがあげられる。

(6)かつて1980年代に高野山大学が行ったラダック地方やスピティ地方のチベット仏教調査は、わが国のチベット研究に大きな足跡を残している。このとき撮影された写真データは、当時の現地の状況を伝える貴重な資料であるが、撮影から30年以上の年月が経過した現在、フィルムの褪色や劣化が一部で進んでいる。これらのデータのデジタル化とデータベース化も本プロジェクトの一環で行う。

(7)チベット美術の文献情報として、チベット大蔵經に含まれる経典や儀軌、注釈書、蔵外文献、過去の調査報告、個別の作品に関する先行研究がある。これらの文献情報を体系化し、画像情報にリンクさせ、画像データとテキストデータの双方を含むリレーショナル・データベースを整備する。

(8)これらの調査研究を実施すると同時に、その基礎的な研究として、人文学のデータベースの開発と問題点の整理、多言語処理が可能な検索システムの開発、チベット研究史における本研究の位置づけや意義の解明なども並行して行う。

#### 4. 研究成果

(1)本プロジェクトの主たる目的であるチベット美術情報プラットフォームの構築と公開を進めるにあたり、データベース化の対象として優先的に取り組んだのが、鶴見大学図書館所の逸見梅栄の画像コレクションである。そのための海外調査を、平成25年度から平成27年度にかけて中国で3度実施した。このうち平成25年度は承德市と北京市で、平成26年度と平成27年度は瀋陽市で行った。調査対象は承德市の外八廟、北京市の雍和宮、故宮博物院、北京市首都博物館、瀋陽市の遼寧省博物館などである。これらの寺院や機関において、逸見梅栄が撮影した写真データの

被写体の特定、保存現状、関連する作品などについて確認作業を行った。

(2)これと平行して、国内の逸見梅栄の写真資料に関して、鶴見大学図書館に所蔵されている資料についての総合的な調査を行った。このうち、すでに鶴見大学図書館によって整理されている約 1500 点のガラス乾板については、平成 25 年度と 26 年度にデジタルデータの採取と、被写体の分析を進めた。そして、平成 27 年度と 28 年度には、新たに存在が確認された未整理のガラス乾板資料約 300 点と、フィルム約 250 点について、同様にデジタルデータ化と内容の確認・分析を進めた。

(3)これらの逸見梅栄の画像コレクションのデータをもとにチベット美術情報プラットフォームの構築を進め、研究期間のほぼ中間地点にあたる平成 26 年度末に、その試行的公開が可能になった。これは、研究代表者がかねてより公開を進めている仏教図像学の Web サイト「アジア図像集成」(Asian Iconographic Resources)の中に新たに加えられ、全体がアジア全域の宗教美術に関する総合的なデータベースサイトとして整備された。チベット美術情報プラットフォームは、その中核を占める。その後、研究期間終了にあたる平成 30 年 3 月までに、順次改良を加え、研究者のみならず一般の人々にも利用可能な汎用的な情報プラットフォームの公開が実現した。

(4)インターネット上のデータベース公開に加え、出版物の形で、逸見梅栄の画像コレクションの公開を進めた。すなわち全 8 冊からなる『鶴見大学所蔵逸見梅栄画像コレクション』を、研究叢書 Asian Iconographic Resources Monograph Series (略号: AIRMS)の一部として発表した。8 冊全体で約 2500 ページにもおよび、海外も含め、これまでに出版されたチベット美術の作品の書籍としては、最大級の規模を持つ。これらのデータベースの公開と本書の刊行は、チベット美術のみならず、戦前のアジア研究、データベース研究などさまざまな関係領域の研究者のあいだできわめて高い関心を集めた。さらに、データベースの構築に際しては、名称、所在、時代などのそれぞれのメタデータに加え、逸見梅栄の過去の著作との対応もあわせて提示するシステムを開発した。これらの情報についても、インターネット上の公開に加え、紙媒体による『逸見梅栄画像資料基本データ集』(AIRMS, No. 12)を刊行した。これらを通して、逸見梅栄のチベット美術に関する調査資料の全貌が、インターネットと出版物という 2 種類のメディアをとおして明かになった。

(5)逸見梅栄関係資料以外の海外調査としては、平成 25 年度にイギリスの大英博物館、

ヴィクトリア&アルバート美術館(以上、ロンドン)、オックスフォードのアシュモレアン博物館において、それぞれが所有するチベット美術、及びそれと関連するインドやネパールの仏教美術コレクションの調査を行った。平成 27 年度と平成 29 年度には、インドのニューデリー国立博物館、ムンバイ市のチェトラパティ・シヴァジ博物館(旧・プリンス・オブ・ウェールズ博物館)が所蔵するチベット及びネパール仏教に関する美術作品の調査を行った。さらに平成 29 年度には、インドに引き続きネパールにおいても、カトマンドゥ市、パタン市、バクタプル市の主要な寺院において、ネパール美術の調査を行った。このうち、ネパールにおける調査は、チベット美術と関連の深いネパール美術にまで研究対象を広げることを目的とし、これによってヒマラヤ地域の仏教美術を総体的かつ重層的にとらえることが可能となった。また、2015 年に発生したネパール大地震が文化財に与えた影響についても、情報収集を行った。以上の調査のうち、チェトラパティ・シヴァジ博物館の資料については、『チェトラパティ・シヴァジ博物館のヒマラヤ美術』(AIRMS, No. 20)を刊行した。アメリカ合衆国の現地調査としては、平成 29 年度にニューヨークのメトロポリタン美術館、ルービン美術館、ボストンのボストン美術館等がそれぞれ所蔵するインド、チベット、ネパールの宗教美術コレクションを対象に行った。それぞれにおいて、主要な作品のデータ採取と写真撮影を行った。

(6)高野山大学が所蔵するインド、ラダック地方及びスピティ地方の仏教寺院の写真データは、保管状況を確認した上で、一部のフィルムに見られるカビの洗浄を行った後、デジタル化を進め、データベース化のための基礎作業を進めた。これとあわせて、被写体の内容確認とメタデータの採取、既発表の文献に掲載された写真との対応、関連する文献資料の分析などを行い、データベース化にむけて準備を進めた。現時点では、撮影者の著作権上の問題で、一部の画像データは公開できないことが判明したが、その他の公開可能なデータに関しては、すみやかに公開するべく継続的に作業を行っている。

(7)研究分担者の個別の研究テーマに関しては、高本康子は戦前の満州におけるチベット仏教及びその美術に関する資料収集と調査研究を継続的に行い、多くの論考を発表した。これらを通して、戦前の日本においてチベット仏教がどのようにとらえられ、それが当時の人びとのアジア観や民族意識にどのような影響を与えたかが明らかになった。海外調査に関しては、米国コロンビア大学の東アジア図書館(East Asian Library)において関連資料の収集と調査を実施した。高田良宏はデータベースの開発、人文学におけるリポジ

トリの構築とその問題点、デジタルフォーマットに統一された資料のアーカイビングなどの研究を進め、本プロジェクトの技術的基盤を整備するとともに、人文学におけるデジタルデータの扱いについて有意義な提言を数多く行った。この他、高島淳はテキスト情報に関する検索システムの開発などを、乾仁志は高野山大学の所蔵する写真データの調査・研究を遂行し、プロジェクト全体の目標達成に大きく貢献した。

(8)おもな研究成果は次項に列挙されているように、きわめて多数で、かつ多岐にわたるが、とくに研究期間の最終段階において、研究代表者の編纂になるチベット美術の総合的学術論文集『アジア仏教美術論集 中央アジア II チベット』(中央公論美術出版)を刊行したことは意義が大きい。本書はわが国で刊行されたほとんどはじめてのチベット仏教美術をテーマとする論文集であるが、これによって、プロジェクト全体の主要な目的である「チベット美術の研究基盤の整備、及び視覚芸術を中心としたチベット文化全体像の解明」を実現することができた。

(9)この他、平成26年4月から6月まで龍谷ミュージアムで開催された「チベットの仏教世界展」に全面的に協力し、美術作品の展示、解説書の刊行、講演会の開催などを通して、研究成果の社会への還元につとめた。なお、研究期間終了後であるが、平成30年4月には、ハーヴァード大学イェンチン研究所(Harvard-Yenching Institute)で開催されるチベット美術に関する国際シンポジウムNew Directions in the Study of Tibetan Buddhist Art Historyにおいて、研究代表者が本プロジェクトの成果の一部を発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計34件)

宮本健弘、高田良宏、他4名「金沢大学における研究データ公開用リポジトリの構築の試み」『情報知識学会誌』査読無、27(4)、2017、337-342。

[https://doi.org/10.2964/jsik\\_2017\\_037](https://doi.org/10.2964/jsik_2017_037)

高田良宏、他5名「金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアムの開発思想と構築の歩み」『情報知識学会誌』査読無、27(4)、343-346。  
[https://doi.org/10.2964/jsik\\_2017\\_038](https://doi.org/10.2964/jsik_2017_038)  
高島淳「インドにおける終焉期の仏教 南インドを中心に」『宗教研究』査読有、91、307-308。

高本康子「大谷探検隊研究の現在」『代仏教』査読有、23、2016、144-152。

堀井洋、高田良宏、他4名「博物資料情報に対するDOI付与の意義と展望」査読有、26(2)、2016、217-220。

高田良宏、他6名「非文献資料のための学術資源群によるサブジェクトリポジトリの構築(構想と進捗状況)」『大学ICT推進協議会2015年度年次大会(AXIES2015)論文集』査読有、2015、1-8。

高本康子「不可視の「チベット」、可視の「チベット」 ヨーロッパと日本におけるチベット・イメージ」『国立民族学博物館研究報』査読有、40(2)、2015、253-266。

高本康子「真言宗と喇嘛教 岩鶴密雲資料を中心に」『密教文化』査読有、234、2015、1-20。

松平拓也、高田良宏、他4名「学術組織間デジタル資料分散共有システム「ARCADE」の開発」『情報処理学会論文誌』査読有、55(5)、2014、1485-1497。

高本康子「戦時期日本の「喇嘛教」認識：「廟会」関連資料を中心に」『日本西蔵学会会報』査読有、60、2014、123-133。

高本康子「多田等観日記に見る真言宗と「喇嘛教」：満洲国建国前後を中心に」『密教文化』査読有、230、2014、5-20。

森雅秀「旧・満洲で撮影されたチベット仏教美術に関する画像データベース」『明日の東洋学』査読無、32、2014、8-10。

林正治、高田良宏、他5名「学術資源リポジトリにおけるLightweight Information Describing Object(LIDO)の検討」『情報知識学会誌』査読有、23(2)、2013、292-297。

堀井洋、高田良宏、他5名「域学術資料の蓄積と共有を目指した学術資源リポジトリの構築」『情報知識学会誌』査読有、23(2)、2013、298-302。

〔学会発表〕(計36件)

高田良宏「金沢大学資料館ヴァーチャル・ミュージアム・プロジェクトの概要と現状」大学ICT推進協議会2017年度年次大会 企画セッション「研究・教育資源アーカイブ環境の構築と運用：課題共有とその組織的対応を考える」(招待講演)2017。

高本康子「石原莞爾と「喇嘛教」 満洲国における仏教施策を中心に」日本近代仏教史研究会第24回研究大会、2016。

高田良宏「研究資源の蓄積と利活用を目指した学術資源リポジトリについて：ヴァーチ

ヤル・ミュー ジアムからサブジェクトリポジトリ、そして今後」人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん2016) (招待講演)、2016.

高田良宏「科学研究費プロジェクトの報告と展望:デジタル化のためのリポジトリから利活用のためのリポジトリへ」学術資源リポジトリ協議会2015年度成果報告会、2016.

Takuya Matsuhira, Yoshiya Kasahara, Yoshihiro Takata, 他3名, Proposal of introducing multi-factor authentication flexibly, 29th TERENA Networking Conference 2015(国際学会), 2015.

高本康子「戦時期日本におけるチベット仏教関連画像資料」日本チベット学会、2013.

〔図書〕(計20件)

森雅秀『チャトラパティ・シヴァジ博物館のヒマラヤ美術』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 20, 2018.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料 8』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 19, 2018.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料 7』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 18, 2018.

森雅秀『アジャンタ石窟の壁画』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 17, 2017.

森雅秀『エローラ第十一窟・第十二窟の菩薩群像』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 15, 2016.

森雅秀『ラジャスターン州ジャガットのアンピカー寺院』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 14, 2016.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料 6』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 13, 2016.

高島淳、内田紀彦、B.B.ラージャブローヒト『カンナダ語・日本語辞典』三省堂、2016.

森雅秀『逸見梅栄画像資料基本データ集』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 12, 2015.

森雅秀『ラダック地方ヘミス寺の八十四成就者図』Asian Iconographic Resources Monograph Series, Vol. 11 February, 2015.

Mori, Masahide, *Khajuraho*, Asian

Iconographic Resources Monograph Series, Vol. 10 March, 2014.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料 5』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 9, 2014.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料 4』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 8, 2014.

森雅秀『鶴見大学図書館所蔵 逸見梅栄コレクション画像資料 3』Asian Iconographic Resources Monograph Series, No. 7, 2014.

〔その他〕

ホームページ等

Asian Iconographic Resources Information Platform

<http://air-p.jp>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 雅秀 (MORI, Masahide)  
金沢大学・人間科学系・教授  
研究者番号: 9 0 2 3 0 0 7 8

### (2) 研究分担者

乾 仁志 (INUI, Hitoshi)  
高野山大学・文学部・教授  
研究者番号: 3 0 1 6 8 4 2 1

高田 良宏 (TAKATA, Yoshihiro)  
金沢大学・総合メディア基盤センター・准教授  
研究者番号: 3 0 2 5 1 9 1 1

高島 淳 (TAKASHIMA, Jun)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授  
研究者番号: 4 0 2 0 2 1 4 7

高本 康子 (KOMOTO, Yasuko)  
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・地域比較共同研究員  
研究者番号: 9 0 4 3 1 5 4 3

永ノ尾 信悟 (EINOO, Shingo)  
東京大学・東洋文化研究所・教授  
研究者番号: 4 0 1 4 0 9 5 9  
(平成25年度のみ)